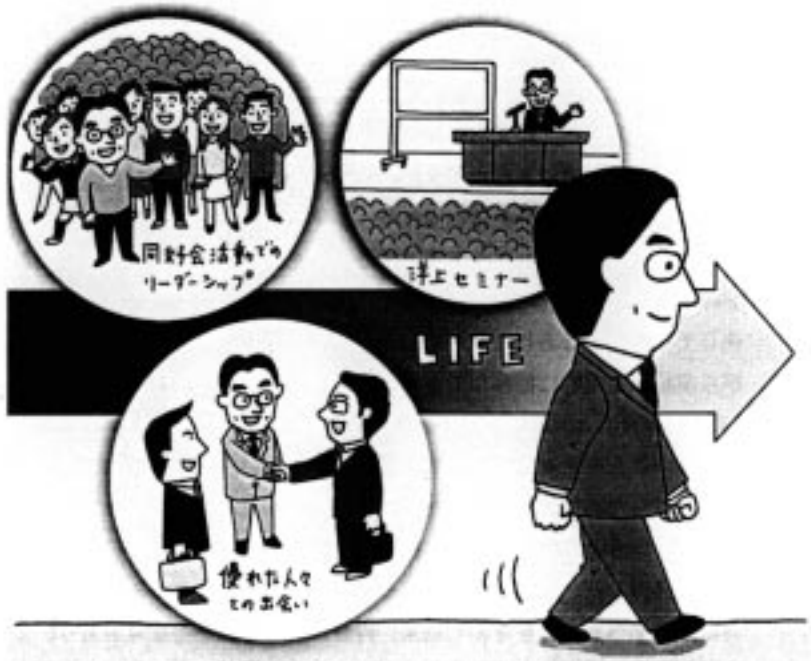
1 キャリアを考える

キャリア物語

最初に、実在するひとりの男性のキャリア物語をご紹介します。

彼が高校1年生の秋、進路選択の機会がありました。迷っていた彼は「これからはブンカの時代だ」と友人が話すのを偶然聞いて「信頼する友人が言うのだから間違いない」と思い、文科系を選ぶことを担任教師に伝えました。その翌日には「文化の時代と言ったのだ。文科系の時代だと言ったのではない」と友人から言われましたが、「まあ、いいか」と大笑いし、そのままの進路にしました。ところがその後、高校が実施した進路適性検査の結果は2回連続で「建築設計デザイン」、つまり理科系だと出たのです。彼は子供の頃から建築物や絵を描くことに興味がありました。確かにその分野は得意かもしれないとも思いました。最初から脱線しているような感じがして迷いました。でも理科系に変更する積極的理由は見つかりませんでした。

結局経済学を専攻した大学時代、同好会活動を通してリーダーシップを発揮することに強い関心を持ち、そこから自己変革を意識するようになり、主将として100名以上を束ねるという経験をしました。この体験が元で、リーダーシップ開発は彼自身のライフワークのひとつになるだろうと予感しました。そして4年生の時には、長男として実家の父親が経営する会社を継ぐべきか、それともビジネスマンとして大きな組織で優秀な人々とともに働くという「やりがい」や「見栄え」を選んだほうがよいかなど、さまざまなことを考えた末、結局政治家になるための準備をすることを選びました（青春期には未熟さの半面で理想に燃え、周囲を驚かせるような決断をすることがあります。そして夢を抱くのは青春期の特徴です）。彼は、「政治の世界のリーダーになって、この国を変えなくてはならない」と思い立ったのです。そのためには「現地現場での実践的な準備期間」が必要だと思いました。また父親の会社は、彼の弟が自ら継ぐことを選んでくれました。弟のほうが明らかにその仕事の適性がありました。



その後、多くの優れた人々との出会いがあり、「地域の活性化とまちづくり」を研究テーマに掲げて活動しながら、積極的に政治活動に向けて準備を進めていきました。そして社会人として7年目、約400名の参加者が船で中国への旅をする「洋上セミナー」の研修部長というボランティア活動を引き受け、参加者の好評を博しました。その翌年には、外資系の研修会社から熱心な誘いを受けました。人材育成にも興味があり、自分には適性があると感じていたので、思い切って入社しました。ちょうど結婚して長女が誕生したばかりで、生活を多少は安定させる必要もありました。「人材育成、とりわけリーダーの育成は、この国の将来にとって最も重要なことだ」と意味づけることによって自分のモチベーションを高く保ち、無我夢中で研修運営の仕事に没頭し、2年後にシティーマネジャー（支店長）になりました。より高いマネジメントのポジションに就きたいという思いは強かったので、そのポジションには満足しました。しかし、意外なことに現場に比べると「面白さに欠ける」という体験でした。

その後、本部に戻り、新しい研修サービスを企画開発する小さな部署を任さ